



Title	「愛」の字に関する考察(上)
Author(s)	田中, 佩刀
Citation	明治大学教養論集, 146: 311-341
URL	http://hdl.handle.net/10291/8832
Rights	
Issue Date	1981-02-28
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

「愛」の字に関する考察（上）

田 中 佩 刀

先に発表した「『農』の字に関する考察」の場合と同じく、本稿でも非常に特殊な字形を挙げて論じなければならぬが、それ等の特殊な文字は、活字を作ることも困難であると思われるので、私が諸資料から臨摸した文字を一括して附図として掲げ、且つそれ等の文字に一連の（番号）を附し、本稿の中では字形を挙げずに（番号）のみを挙げて論ずる、という方法を採用ことにしたい。本稿を御覧になる方には極めて面倒なことであろうし、私の臨摸も拙くて見苦しいものであろうが、どうか御諒承頂きたい。

「愛」という字は、調べて見るとその字形はさまざまであることが分る。そして、古い字形の愛と現行の字形の愛とを較べて見ると、その字形は著しく異なっている。

また、愛の字は近頃では字典の心部に属する文字になっているが、古体の場合には、そしてそれは古い時代の字書の場合にはということにもなるが、必ずしも心部に属してはいない。

現代でも、中華人民共和国に行われている簡体字では「愛」という字形に変わっており、心部とは無関係な字形になっている。『辞海・一九六五年新編本』（中華書局、一九七九年香港版）を始め、同国で刊行されている字典では爪（爿）部六画に「愛」を入れている。但し、本稿では簡体字を扱う必要は無いので、参考に挙げたまでである。

それでは、「愛」の字の古い字形としては、どんな形のものがあるだろうか。

亀甲獣骨文字の中に愛の字があるかどうかを、島邦男氏の『増訂・殷墟卜辞綜類』（汲古書院、一九七一年増訂版）に附録された索引に拠って調べて見たが、現行の字形の愛の字は勿論のこと、異体字と思われるものも見当らない。解説できる甲骨文の中に愛の字が含まれていないのか、或いは甲骨文の段階では愛の字が造られていなかったか、詳かではないが、甲骨文の中に現行の心部に属する文字が少ないということから推測すれば、人間の心理を表現する抽象的な内容の文字は、まだ多くは作られていなかった、とも言えよう。但し、これは現行の愛の字形と愛の字義とからの推論に過ぎず、愛の古い字形に於ける愛の原義が果して現行の愛の字義と一致するかどうかは今しばらく措くことにはしたいと思う。

張謇氏その他の編輯に成る『金石大字典』（京華書局、一九七五年）は、もと一九二六年に汪仁寿氏の手によって編纂された同書の影印をもとに作られているものらしいが、金石文の検索には便利な書である。この『金石大字典』の卷十三の心部に「恠」の見出しのもとに、古い字形の愛の字が十三字掲げられている。また、見出しの字の下には、「小篆愛字。隊韵。」と註記しているが、字義もしくは解字に就いては何も記されていない。そして、この字典に於て『説文解字』を始め諸資料から採録された十三個の愛の字は、概ね五種類に分類し得る異体字である。いずれも後に述べることになる字形であるから、ここでは論じないで置くが、現行の愛の字形とは異なるものの、甲骨文には見えなかった愛の字が、金石文には登場しているのである。

さて、林宏元氏の『中国書法大字典』（中外出版社、一九七六年）から、愛の字を幾つか拾って見よう。

(1)は『説文解字』から採録している。(2)は魏の鍾繇の『淳化閣帖』から採録したもので、現行の愛の字と大差は無い。そして(1)から(2)への字形の変遷は、その間に漢隸の字形を置くことによって幾らか繋がりを感し得るのである。(3)と(4)とは『隸辨』から採録された漢隸であるが、(1)から(3)(4)を通して(2)に変わって行く過程を考えるのは、それほど無理ではあるまい。後に再び論じなくてはならないが、(1)は、𠂔(心)と攴(攴)から成り立っている字である。この𠂔という字は𠂔(𠂔)という意味の字であって、山田勝美氏は『漢字の語源』(角川書店、一九七九年版)の中で、篆文がこの字の上部を𠂔に作るのは誤りで𠂔に作るべきだ、と述べている。𠂔という字は、むせぶ、という意味が通説である。

二

そこで、後漢の許慎の『説文解字』(中華書局、一九七七年版)から、愛の字に関する記事を拾い出して検討して見よう。

先ず字形であるが、現行の愛の字形と同じ形のものはない。すなわち、(1)と殆んど同じ形の(5)の字形である。ただ同じ『説文解字』でも本によっては写し方が少し違っている程度のことには有るが、いずれも同形と認めていいと思われる。『説文解字』の本文では、愛の字を説明して、

(5)、行兒。从攴、恠声。

と述べている。(句読点は私が施した)

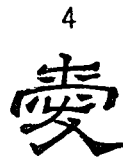
右の「行」は、『説文解字』に、

(6)、人之歩趨也。从彳、从亍。凡行之属皆从行。

1 

2 

3 

4 

5 

6 

7 

8 

9 

10 

11 

12 

13 

14 

15 

16 

17 

18 

19 

20 

21 

22 

23 

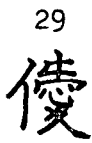
24 

25 

26 

27 

28 

29 

30 

55


49


43


37


31


56


50


44


38


32


57


51



45


39

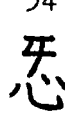

33


58


52



46


40


34


59


53


47


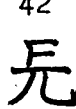
41


35

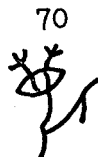
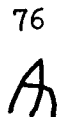

60














54


48


42


36

103	100	97	94	91
				
	101	98	95	92
				
	102	99	96	93
				

HÁN-VIỆT TỰ-ĐIỂN (Biên Tập ... THIỀU-CHỦU)
 Nhà In ĐUỐC-TUỆ, 1942, Hanoi.

愛

- Ái (1) Yêu thích. Như ái mộ 愛慕 yêu mến.
 (2) Quý trọng. Như ái tích 愛惜 yêu tiếc.
 Tự trọng mình gọi là tự ái 自愛.
 (3) Ôn thắm, như gi ái 遺愛 để lại cái ơn
 cho người nhớ mãi.
 (4) Thân yêu, Như nhân mạc bất tri ái ki
 thân 人莫不知愛其親 người là chẳng ai
 chẳng biết yêu thừa người thân. Tuc
 gọi con gái người khác là lệnh ái 令愛,
 cũng viết là ái 媛.

とある。また、「臯」は、貌（かたち）ありさま、の意（かたち・ありさま、の意）と同じ字である。従って、『説文解字』では、「愛」という字は、進み行く様子をあらわす。」と説明していることになる。

「𡗗」は『説文解字』には、

(7) 行遲曳𡗗。象人兩脛有所躡也。凡𡗗之属皆从𡗗。

と説明している。右の「躡」は『説文解字』に「躡、舞履也。从足、麗声。」とある。すなわち躡は舞踊の時に履く靴という意味であるが、𡗗の説明中では動詞に用いられていると考えられ、諸橋轍次氏の『大漢和辞典』（大修館書店、一九六八年版）に見える「つつかける（靴を突掛けて履く）・おもむろに行く」などの意味を当て嵌るのが適切であろうと思われる。また「兩脛」の脛（かじ）の字は、スネと訓読してムコウズネの意味に用いられる字であるが、この場合は総称的な意味でのアシという意味に用いているように思われる。

すなわち『説文解字』に於ては、「脛、胫也。」と説明しているが、この胫（かじ）は、ムコウズネの膝（ひざ）に近い部分を意味しており、その胫は「胫、脛崙也。」とあり、崙（かみ）は上の部分を意味している。「腓」という字はコムラ（フクラハギのふくれたところ）を意味するが、或は腓（かじ）は崙（かみ）に通ずるのではないかと思われ、そうすると「腓、脛腓也。」の腓（かじ）（フクラハギ）は胫（かじ）（ムコウズネ）とは概ね同じものを指していることになる。従って「脛」はムコウズネでもフクラハギでもある総称的なアシという意味であると考えられる。

そこで「𡗗」の説明をもう一度考えて見ると、「𡗗は、のろのろと足をひきずって進むこと。人の兩足がゆっくり進むところを象ったものである。云々」と述べているように解釈されるのである。

次に、「恣声。」であるが、この恣（あ）という字は、上の部分の左（ひだり）を𡗗としてゐる書も有って、判然としない。先述の如く、山田勝美氏は𡗗に作るべきであるとしている。『説文解字』では、𡗗の字形を(8)の如くにし、𡗗の字形を(9)の如くに

しているのである。従って(5)の愛の字の場合には、尃と心と女とより成り立つと判断される。

また、『説文解字』では尃と心とより成る恚を「恵也。」としているが、『康熙字典』(中華書局、一九七五年版)には尃と心とより成る恚を小篆の愛の字として、「恚者恵也。」としている。

諸橋氏の『大漢和辞典』では、恚をアイと読んで愛の古字であるとし、更にキと読んで忌に同じだとしている。忌は『説文解字』には、「(10)、憎悪也。从心、己声。」と説明している。愛は憎しみの始まりだというが、しかし、同じ恚の字に、愛と憎悪という謂わば相反している二つの意味が有るということは奇妙な感が無いでもない。『説文解字』を見れば、他にも例えば、「慰、安也。从心、尉声。一曰、恚怒也。」の如き文字が有るには有るが、恚の字が二つの相反する意味を持つということとは、単に文字の用法が拡大したということなのだろうか。それとも、愛の古字である「恚」と、忌の意味であった「恚」とが混同され混用された結果なのであろうか。

ついでに恵の字について『説文解字』を見ると、「(11)、仁也。从心、从夷。」となっている。そして「仁、親也。」となっているのである。また、『説文解字』に於ける恵の字の部首は東部であるが、『康熙字典』を始め、今はふつう心部に属している。

なお、段玉裁の『説文解字注』(絳韻樓版の影印、蘭台書局、一九七〇年)では「恚声。」の恚の字を、恚声としている。これは(8)の尃を尃の形に写しているのである。

更に、朱駿声の『説文通訓定声』(影印本、藝文印書館、一九七五年)では、(12)の字形を挙げて「恚、恵也。」とし、(13)の字形を挙げて「恚、行兒。」としている。この(13)は『説文解字』の(5)と小異は有るが同形と考えられよう。以上、『説文解字』に於て愛の字は女の部に属しているので、女について先に述べたのであるが、(1)にしても(5)にしても、或は(12)(13)にしても、すべて心という字形が入っている点も注意すべきである。

そこで心に就いて若干の説明を述べて置きたいが、『説文解字』の心の項には、

(14) 人心、土蔵。在身之中。象形。博士説、以為火蔵。云々

とある。右の土蔵は、五行の土にあたる臓器という意味で、博士（五経博士などの官職にある学者をさす）の説では火にあたる臓器だというのである。因みに明の李時珍の『本草綱目』（甘偉松の増訂による『新校増訂・本草綱目』、宏業書局、一九七五年版）に拠れば、「心蔵神為君火、包絡為相火、云々」となっている。この蔵を臓と読むこともできるが、私は蔵スル（動詞）と読む方がいいと思う。すなわち「心ハ神ヲ蔵シテ君火ト為リ包絡シテ相火ト為ル。」と読むのであるが、心臓は五行の火にあたるとしていたのであって、『説文解字』が土とするのに対し、引用された博士説の方に一致しているのである。

また『本草綱目』に拠れば、「脾蔵智、属土、為萬物之母、云々」とある。つまり脾臓は五行の土にあたるとしているのである。そこで『説文解字』の脾の項を見ると、「脾、土蔵也。」となっている。段玉裁の注には、心臓を土蔵とするのは古文尚書の説だと記しているから、許慎はその説に従って心臓を土とし、脾臓も通説に従って土としたのであろう。両方が土になっている点に気づいているからこそ、心臓を火とする博士の説を併記したのであると考えられる。もし、心臓を火とすれば、『説文解字』に於ては、肝臓の木、肺臓の金、腎臓の水、脾臓の土と併せて、五行が揃うことになり、『本草綱目』の説とも一致するのである。

なお、参考までに『本草綱目』の卷一・序例上から抜き書きして見ると、

肝蔵血、属木、胆火寄于中。主血、主目、主筋、主呼、主怒。

心蔵神、為君火。包絡為相火、代君行令。主血、主言、主汗、主笑。

脾蔵智、属土、為萬物之母。主營衛、主味、主肌肉、主四肢。

肺藏魄、属金、総撰一身元氣。主聞、主哭、主皮毛。

腎藏志、属水、為天一之源。主聰、主骨、主二陰。

となつてゐるのである。『本草綱目』は『説文解字』よりも新しい書であるが、その内容は古くからの医家の説を録したものと考えられる。

さて、「心」という文字は、『校正甲骨文編』（藝文印書館、一九七四年）の索引で調べた限りでは見当らず、甲骨文には見えない文字ではないかと思われる。そして、島邦男氏の『増訂・殷墟卜辞類』の漢字索引によって調べて見ても、心の字は見当らないのである。

ただし現行の字典に於て心部に属する字と、現行の字形に於て心という字を字画の中に含む字は、若干存在する。『増訂・殷墟卜辞類』の例を挙げると、「必」（15）、「恒」（16）、「悔」（17）、「寧・寧・薄」（18）、その他、「慶」などである。しかし、いずれも其の甲骨文には心が含まれていないのである。また、それぞれの字の成立については諸家の見解が有るが、例えば、「寧」の字に就いて、李孝定氏は『甲骨文字集釈』（中央研究院歴史語言研究所、一九七四年、全七冊）の中で、「契文不从心。古文字每增心、為文飾。云々」と述べている。

なお、白川静氏解説の『金文集』（書跡名品叢刊、二玄社、一九六三年、全四冊）の第一冊（殷周）には心の字は見当らないが、第二冊（西周）以下には、師望鼎の心（19）や大克鼎の心（20）が見られ、その外にも、師望鼎の徳（21）や、也殷の念（「字形がハッキリ見えないが（22）の形のように思われる」、大克鼎の念（23）、瑯生殷二の慶（24）の如く、ここでは煩を避けて省略するが毛公鼎の懷・懼・憲・惠・徳などの如く、字画中に心の字を含む文字が見られるのである。

ともあれ、「心」という字は、心臓の形を象つたものであることは、字形からも十分に判断できるのであるが、現在は心部に属する文字が少なくないにも拘らず、甲骨文に心という字、或は心部に属する字が見当らないのは少々不審である。

恐らく卜辞には不必要であったのだろうが、心・肝・肺・脾・腎などの字が甲骨文に見当たらないということは、当時はまだ人間の内臓に関する解剖的な知識が乏しかったのではないかと推測させられるのである。

体内にあるものとしては「血」(25)という字(異体が幾つか有る)が、甲骨文に見えている。ただ、血は体外に流れ出ることが有って人々の目に触れ得るものであるし、『説文解字』に拠れば、この字は本来は人間の血を意味するものではなく、祭器に入った犠牲の血を字形にしたものらしい。すなわち、「血、祭所薦牲血也。」と説明している。

要するに、心という字の成立がいつであったかは明かではないが、原義は「心臓」であり、それが先に引用した『本草綱目』の記事にあるような古代の医学的見解から、心臓を精神の働きと結びつけて考えるようになり、心という字が「こころ」という抽象的な意味を持つに至ったと思われる。師望鼎などに見える心の字の用法もこころという意味になっているのである。

以上で『説文解字』に於ける愛に關聯する文字に就いての説明を終る。

三

次に、高田忠周氏の『古籀篇』(初版は一九一九年。いま宏業書局の一九七五年縮印版を用いる)に於ける愛の字に関する事項に就いて調べて見よう。

『古籀篇』の索引では、愛は心部に属する字になっており、卷六十三の見出しの文字は(26)の字形であり、籀文は(27)の字形となっている。その説明には「依既心變三字、為此篆形。按説文、(5)行兒。(28)声。蓋与(29)同字。」とある。

すなわち(27)の字形は、既と心と變の三字によって作られているのである。既の籀文は(30)の如き字形で

あり、心は(20)、變は(31)の如き字形である。ただ、『説文解字』には既を(32)、變を(33)の如き字形にしている。(27)の字形の左側は心であり、右側の上部は(30)の字形右側と同じで、(27)の字形右側の下部(謂わば足もと)は、(31)の下部と形が同じである。

高田忠周氏は、(29)の字義に就いて「孝子之心、(28)慕不息。故仿佛見親行步之状也。」と説明し、また字形の変遷を考慮した上で、(28)は(26)の省文であるが故に、(28)と(26)とは同じ字であるとしている。従って、(26)すなわち(27)は、(28)とも(29)とも同じ字であるということになる。そして字義としては、仿佛とか慕とかを挙げている。

高田氏が(26)の籀文を(27)とし、既と心と變とによって此の篆書の字形ができたとする説明は、(26)が字義の面に於て既・心・變と如何に関連しているのかという点に就いては納得できるような説明になっていないのである。なぜ右の三字から(26)の字が生れて来たのか、三字の各字義から(26)の字義が生れて来た経緯の説明が無い。つまり、(27)の字義を、相似する字形を持つ三字から説明してもいず、右の三字の字義から(27)の字形が生れたという説明にもなっていないのである。もっと具体的な理由による説明が欲しいと思うのである。

四

さて、藤堂明保氏の『学研・漢和大字典』(学習研究社、一九七八年)には「愛」をどう説明しているだろうか。

右の字典に拠れば、古体として(5)を掲げ、更に(34)および現行の愛を併せて掲げている。しかし(34)の下半分の心を除いた部分は無の誤りではないかと思われる。また、(5)の字形の上部は(9)ではなく(8)であるから、(34)は正しくは「恚」であるにせよ、(5)の字形の中の心の上の部分は充であるべきはずと考えられる。

藤堂氏は愛を次の如く説明している。

无とは、人が胸を詰まらせて後ろにのけぞったさま。愛は「心+欠（足をひきずる）+音符无」の会意兼形声文字で、心がせつなく詰まって、足もそぞろに進まないさま。既（既。いっぱいである）——漑（水をいっぱいに満たす）と同系のことば。また、哀（胸が詰まってせつない）ときわめて近いことば。

更に、字体として、「悉」「(26)」は「愛」の異体字、と説明しているのである。

次に同じ字典で「无」の項を見ると、甲骨文として(35)を掲げ、篆書体として(36)を掲げている。(36)は極く僅かながら(9)の字形と相異している。その解字は、

腹がいっぱいになって、ため息をつくさまを描いた象形文字。この字形は、欠（腹がへってしぼむ）と反対である。のち、ごちそうを示す部分をそえて、既（既）とも書く。

同じ字典の「既」の項には、甲骨文として(37)を掲げている。そして其の解字は、

无は、腹いっぱいになって、おくびの出るさま。既は「ごちそう+音符无」の会意兼形声文字で、ごちそうを食べて腹いっぱいになること。限度まで行ってしまいう意から、「すでに」という意味を派生する。漑（田畑に水をいっぱいみたす）——概（概。ますに米をいっぱいに満たす。ますかき棒）——慨（慨。胸いっぱいになる）などと同系のことば。と述べているのである。

また、同じ字典で「欠」の項を見ると、篆書体として(38)を掲げ、足の甲の絵を添えて、次のように説明している。

下向きの足の形を描いた象形文字。夆（降）・各（足が石につかえる）・夆（逢）などの上部に、足を示すしとじて用いられる。▽夂は別字だが、のち、混同した。

更に「夂」の項を見ると、

足を引きずるさまを描いた象形文字。憂（心配で足が進まない）・愛（胸がいっぱい足が進まない）などの下部に

含まれる。▽又ちは、別字だが、のち、混同した。

と、足あしの裏うらの絵ゑを添そえて説明せつめいしている。

ついでに同字典で愛あいに近い言葉とされる「哀あひ」の解字を見ると、

衣いは、かぶせて隠かくす意いを含む。哀あひは「口くち十じゅう音符ふたご衣い」の会意兼形声文字で、思しいを胸むね中ちゆうにおさえ、口くちを隠かくしてむせぶこと。愛あい（せつない思しいをこらえる）——暖あひ（胸むねがつかえて声こゑが漏もれる）と同系のことば。▽憐れんは、思しい切り悪わるく未練みれんの続つくこと。

と、(39)の篆書体の哀あひその他を掲かげて説明せつめいしている。また、字画中に又ちが含まれ、字形も愛あいに近い「憂ゆう」の解字は、

「頁げつ（あたま）十じゅう心しん十じゅう又ち（足あしをひきずる）」の会意文字で、頭あたまと心こゝろが悩なやましく、足あしもとどこおるさま。かほそく沈しんみがちな意いを含む。優ゆう（しずしずと動うごく俳優べいゆう）——幽ゆう（細こまかくかすか）——天てん（か細こまい）などと同系のことば。▽愁しゅうは、心配しんぱいで心こゝろが細こまく縮ちぢむこと。

と述べており、篆書体(40)などを掲かげているのである。

五

『学研・漢和大字典』の中に見える、「愛あい」の字および愛あいに關聯する諸字の、藤堂明保氏の解字に就いて検討したいと思おもう。

「愛あい」の字は「心しん十じゅう又ち（足あしをひきずる）十じゅう音符ふたご无む」の会意兼形声文字であるとしているが、その「无む」とは、「人ひとが胸むねを詰つまらせて後ろうしろにのけぞったさま」であるとする。ところが、「无む」の字の項には「腹はらがいっぱいになって、ため息ためいきをつくさまを描えいた象形文字」だとしている。同じ文字を説明しながら其の表現には少々喰くい違ちがいが有あるように感じられる。

无³⁵の甲骨文(35)は、人間の左側面を描いたように思われる。いま、『校正甲骨文編』(藝文印書館、一九七四年)から例を選び出して見るが、「女」という字の甲骨文(41)の字形の下部は、女性が膝を地に着けた姿であり、(41)の場合は左へ向いた女性の姿、すなわち女性の左側面を描いたものである。従って、甲骨文(35)は(41)から類推して、人間の左側面を描いたものと考えていいと思う。

所で先に引用した愛の項にある无³⁵の説明の「胸を詰まらせて」という説明は何を根拠にしているのだろうか。无³⁵の字の項の「腹がいっぱいになって、ため息をつくさま」とか、同字典の「既」の字の項に見える「无³⁵は、腹いっぱいになって、おくびの出るさま」とは飽食した状態であるから、飽食によって腹部が膨張した結果、胸が圧迫されたと考えたものなのだろうか。

无³⁵の字について『説文解字』には、

(9) 飲食³⁵、不得息、曰(42)。从反欠。……(43) 古文(42)。

と説明している。(42)は無³⁵と同じ字である。右の「飲食³⁵」は段玉裁は「³⁵」と訂正しているのであるが、意味は結局は同じであろう。飲食の結果、息苦しくなった状態が無³⁵だというのである。藤堂氏が「おくびの出るさま」と説明しているのは「³⁵」(または³⁵)に拠ったものであろう。

さて、(35)の上の部分は人間の頭を描いていると考えられるのであるが、頭部が前を向いているのか、横を見ているのか、天を振り仰いでいるのか、遽かに判断し難いところである。

(44)および(45)は「祝」の甲骨文であるが、(44)の右上部の字形は、恐らくは頭部、頭部でなければ口^くを表現するものと考えられ、(44)と(45)とを比較すれば、(44)の右上部は、ほぼ間違いなく頭部であると言えよう。また、(44)と(45)の首から下の線は一致しており、背と腰と膝を地についた脚と、身体の線を示していると思われるのである。(45)

の、前に伸ばした両腕から類推されるように、(44)の首のあたりから下へ垂れる線は、胴の厚みを描いたのではなくて、腕を描いているように思われる。そして、その腕は手を膝の上に置いた形になっているのである。従って(35)も、手を膝の上に置いた形である。すなわち、ほぼ真ッ直に垂れている線は腕であって、胴の厚さを示している線ではないのである。且つ(35)は人体の左側面を描いていると考えられるのであるから、仮に胴の厚さが示されているとしても、腹部が膨張している形、謂わゆる腹が前に出た形にはなっていないのである。「気竝」の竝は『説文解字』には「不順也」と説明しているのであるが、「飲食ノ気竝ニシテ(不順であって)、息スルコトヲ得ズ」というのは、必ずしも暴飲飽食の結果を指しているとは限らないと考えられる。


六

藤堂明保氏は先の説明の中で「ごちそうを示す部分をそえて、既とも書く」と記している。既の甲骨文は(37)である。既は、『説文解字』に、

(32) 小食也。从皀、先声。論語曰、不使勝食既。

と説明している。「小食也」については『大漢和辞典』に、喉がつかまって少しずつしか食べられないことである、と説明している。

右の『論語』からの引用の言葉は、郷黨第十に見えていて、ふつうは「肉雖多、不使勝食氣」となっているのである。この点について、陳舜政氏は『論語異文集釈』(嘉新水泥公司文化基金会、一九六五年)の中で、

說文皀部引此句「氣」作「既」。案、空氣之氣、本作气、篆作、象形。「氣」字从米、本是鎮稟的本字。又作「稟」。(見說文)。故說文所引論語作「既」、實際上是「稟」的通假字。礼記中庸：「既稟称事。」鄭玄注云：「既、讀為鎮。」

而聘礼鄭注又說：「古文既為饋。」足証本作既、或氣。故論語「食氣」与説文「食既」同。饋与擧都是本字義失之後、再造的或体与累增的重文。

と説明している。饋稟きん（または饋廩）は、肉と米、または人に贈る米、という意味である。そして『論語』の右の箇所は、ふつう、「肉の量が多くても、米飯の量以上には食べない。」という意味に解釈されている。

藤堂氏の挙げている既の甲骨文は（37）であるが、既の異体は幾つか有って、例えば（46）は（37）と酷似するが、頭部からの線の伸び方が違っており、（47）は右の部分つう（旁）の人物の向きが右側面を見せており、（48）は左の部分へん（偏）の曷が右側（旁）の人物と入れ違い、且つ人物は右側面を見せており、（49）は（48）とほぼ同形ではあるが人物は左側面を見せている。また、（50）は右側の人物の頭の部分が他の既とは違って、（44）の祝しゆの右側（旁）の人物と同じように真ッ直に立っているのである。

七

𠂔しゆと、既きの右の部分つう（旁）の𠂔しゆとは、人の膝をついた姿を描いたものであって、その𠂔の字形の上部は頭部に該当することは確かであるが、その頭部が横向きに描かれているのは何故か、という問題が有る。

同じ祝しゆという字でも、（44）と（45）とは頭部の輪郭が有るものと無いものと両形が有る。他の例を挙げると、同じ字なのか別字と混用されたのか、幾らかの問題は有るが、（51）の郷きやうまたは饗きやうと、（52）の卿きやうとは、やはり頭部の形の有無だけの違いである。

また、（53）は「子」という字であって頭部が附いている。しかし（41）の「女」には頭部が無い。強いて探すと、頭部に横線の入った（54）の女の例が一つ見つかった。女にと子しとから成る「好」という字でも（55）の如く、女に頭部の形を示

したものは無い。

そもそも「人」という字も、(56)の字形の例の場合を除いて、頭部の形が示されている人という字は見当たらないのである。

(54)は恐らく、ふつうの女性の意味の女という字であろうが、字形の上部が或る形に描かれている(57)は、「妾」という字なのである。この妾は『説文解字』では擧(罪の字と同じ)の字のグループに入れられている文字ではあるが、とにかく一般的に、頭部の形を表現する何かの形が附いている場合は、それなりの意味を有していると考えていいと言えよう。

(44)の字形の右側の部分(旁)は兄であるが、甲骨文の兄は、(57)(58)(59)(60)などの字形を有している。この兄の字形の上の部分、すなわち頭部が、他の字形に置き換えられると、例えば(61)は「鬼」であり、(62)は「光」という字である。それでは、先(35)と兄(57、その他)とはどのように違うのであろうか。

先の頭部は、ちょうど兄の頭部が横になった字形となっている。『校正甲骨文編』には𠄎(きまらない、という意味)の甲骨文として(63)の字形を掲げ、「象人拳首凝思之形。貞人名。」と註しているが、(63)の字形の上の部分、すなわち頭部が、首を挙げて思いを凝らすということならば、先の字形の場合も、首を挙げている形と考えていいと思われる。

そして兄(57、その他)の頭部の左右に突き出ている線が、頭部の上の部分を表しているとすれば(そうとしか考えられないが)、先(35)および既(46・47・48・49)や郷(51)に含まれる先は、膝の向きから考えて頭部を後へ曲げている状態のように見える。ただ、(47)と(51)の字形中の先は、膝の向きの反対に顔を向けているので、ちょうど肩越しに後方を振り返っているような状態のように見える。いずれにせよ、先の字形の頭部は、兄の字形の頭部とは異なっていて、或る特別な姿勢をとっている、と考えられる。

もう一つの問題は、兄や兂の頭部と考えられる部分の字形が「口」の字形とほぼ同じ形を示していることである。口の甲骨文は(64)である。従って、兂や兄の頭部にあたるところは、口によって示されていると考えることもできるのである。それは、それぞれの字が、飲食または祈禱などと関係が有るためかも知れない。しかし、各字形の上の部分は、𠂔や鬼などの字形から考えて、やはり口だけではなく首から上の頭部を表わしていると考えるのが妥当であると思う。

八

甲骨文字の字形を判断するのは難かしいことであるが、字形が作られる場合の原則および同じ字形に共通する意味は、考慮されていいと思う。勿論、字形だけで字の成立を説明し、意義を論ずることは、字音だけで字を云々するのと同様に、研究方法としては不完全であることは論を俟たない。

甲骨文の象形文字が作られる場合の一つの原則として、立体的なものを写す場合に、正面から写したもののよりも、側面から写したものが多くのように思われる。また、全部の字について調べたわけではなく、印象だけからの判断であるが、どうもそのように思われるのである。

例えば、既(37)の兂の部分、兄(57)の頭部(口の部分)、鬼(61)や光(62)の頭部、子(53)、或は立(65)、などの字形を見ると、それ等の字形は、対象の物の形を正面から写していると考えられる。

しかし、(26)の籀文(27)の右側の部分、既(30)の右側の部分、𠂔(31)、兂(35)、女(41)、人(56)などは、対象とする物の形の側面を写したものである。そして正面から写したのも、側面から写したのも、殆んどが極く簡単な線によって、かなり巧みに輪郭を描いているのである。

また、頭部の描き方を見ると、例えば、「隹」は(66)から(67)の字形が生れており、「虎」は、かなり綿密な象形文字

が(68)となり、更に(69)となっており、「鹿」もかなり細かな象形から(70)となっている。このような幾つかの字形を見ると、単純な線が表しているものの背後には、かなり具体的な形が存在していることが知られると共に、単純な線の描く輪郭の小さな変化や、字と字の間の微妙な相違も、注意深く読み取るべきであることが納得されるのである。

先述の无の字の頭部の描かれ方も、そういう意味で慎重に判断されねばなるまい。結局、「无」という字は、口という字形に象徴される頭部が、上を振り仰いでいる形に描かれ、且つ、地に膝をついた人の姿として描かれていると考えられる。そして意味としては、『説文解字』の「飲食氣逆、不得息」という条件を指すものと考えられるから、食べ物がつかえて息がでない、という意味であり、諸橋轍次氏の『大漢和辞典』に記す如く「むせぶ」と訳せばいいであろう。但し、右の「飲食氣逆」は同辞典に説明するように「飲食の気がこみあげて」ではないように思われる。先述の如く、藤室明保氏も「腹いっぱいになって、おくびの出るさま」としているのであるが、この場合の逆(原文では逆)は、逆行や逆上の意味よりも、先に引用した『説文解字』の「不順也」という字義に従って、食べ物が喉の奥へ落ち込んで行かない状態、食べ物の消化がうまく行かない状態と解釈する方が妥当であるように思われる。

因みに无(9)の反対が欠(71)だとされており、『説文解字』には「(71)張口气悟也。象气从儿上出之形。云々」(悟は寛、儿は人と同じ意味)と説明している。すなわち欠は「あくび」だと解釈されている。无(9)と欠(71)との字形を比較すると分るが、欠は無の字形を裏返しにした形になっている。しかし、欠の甲骨文を見ると、(72)の如く无(35)と字形が殆んど一致するものや、(73)の如く无(35)と膝の向きや形が少し異なる程度のもなど、甲骨文に於ける无と欠との字形上の区別は曖昧である。

次に、「爰」の字形の下の部分の爰であるが、『学研・漢和大字典』の中で藤堂明保氏は、爰は爰と混用されている、としている。先に引用したように、藤堂氏は爰と爰との説明に、爰には足の裏の絵を、爰には足の甲の絵を添えている。

さて、『説文解字』に見える爰の字形は(7)であり、爰の字形は(38)である。しかし、『校正甲骨文編』で爰を見ると(74)や(75)の字形が掲げられている。『殷墟卜辞類』には、爰として(76)、歩として(77)、止として(78)を掲げている。仔細に見較べると分ることであるが、爰(74)の裏返しが爰(76)となり、爰(74)の天地を逆にすれば止(78)の字形となるのである。但し『古籀篇』には(79)の字形も止として挙げている(一説には此の字形は「之」である)。また『古籀篇』には爰として(80)その他の字形を掲げている。

藤堂氏が、爰を足の甲とし、爰を足の裏とする根拠は何か分らないが、少なくとも爰や爰の甲骨文の字形からでは判断できないはずである。正面から写すか、側面から写すか、どちらかの甲骨文が多い中で、私はまだ物の形を裏面から写した例を知らない。そして爰以外にも裏面から写した字が有るのだろうか。甚だ不審である。

いま、一つの例を挙げて考えて見たいが、「𧇧」という字が有る。下の部分には爰が含まれているが、この甲骨文は(81)で、『古籀篇』から先に引用した(31)とも原則的には同形であると考えられる字形である。趙友培氏は『国字基本結構研究』(中国語文月刊社、一九七二年)の中で、𧇧は獼猴すなわち猿のことだとして、もともと母猿に抱かれた子猿の象形であったが、誤って𧇧と𧇧と二つに分れ、𧇧は一本足の龍に似た妖怪になってしまった、と説いている。つまり、子猿(82)が、妖怪(81)と、母猿である𧇧(83)の二つの字に分れてしまったのだというのである。この(81)の𧇧と(83)の𧇧とは足の形が同じである。そして其の形は爰(74)または(75)にも良く似た形なのである。

趙友培氏の説明の中で、「誤分爲二字」（誤つて二つの字に分れた）とする根拠が何であるか不明であるが、その点を除けば趙氏の説明は納得できると思われる。そして、夔(81)と夔(83)との足の形が、上から見た足の形としか考えられないことから推定すれば、夂(74)は、上から見た足の形と考えられるのである。そして夂(75)は、(81)と(83)の足の形から推して、(74)の字形に足首が書き添えられている字形だと判断できるのである。藤堂氏が、夂を足の裏の形としているのは妥当ではない。

夂(74)と同じ字形が含まれている他の甲骨文を見ると、止(78)、止(79)、止(84)、止(85)が有る。この四種類の止の字の中で、(84)は上から見た足の形、もしくは足跡の形であると考えられる。そして、(85)の止は、(84)の止の字形の黒い部分(三角形のところ)を消去した残りの線だと見ることができ、(78)の字形の変形であると考えられる。

また、「歩」の甲骨文は(77)であるが、高田忠周氏の『古籀篇』には、歩として(86)の字形を掲げている。この(86)の字形から(77)の字形を見れば、(86)の字形が単純化されたものであることが分ると共に、(87)の文字(止の78と同じ字)に矢印で示した部分は、足の親指をあらわしていることが理解されよう。

その他、「正」の甲骨文(88)と(89)、「足」の甲骨文(90)、「往」と考えられる(91)、「出」の(92)、「各」の(93)、など総て足の形に関連のある字形であるが、特に足の裏を描いたと認めるべき字形は無いようである。

さて、甲骨文に於て、(74)や(75)の夂と、(76)の夂とを較べると、足の親指と思われる部分が、左右に入れ違っている以外は、字形上に大差は無いし、篆文でも夂(7)と夂(38)とは、上へ突き出ているか出ていないかという程度の字形の差である。

趙友培氏の『国字基本結構研究』には、「止」の本義を「足の趾」であると解し、止から分れた字として、夂に就いて次のように説明している。なお、左に引用するに際しては、同書に「一六二第四形」と記している所を(94)に置き換え、注

音符号で示した発音を拼音字母に置き換えた。

本義——夂与止同。(止象脚尖向上、所以从止的、有出去或上升的意思。夂象脚尖向下、所以从夂的、有来到或下降的意思。)

結構——是止的分化字。参看(94)。说文另有夂字、讀ㄉㄟ、甲金文皆無分別、当与夂(止)為一字。

(94)の字形は、(76)の字形と同じであると思う。また、趙氏が挙げている止の字形は(78)その他である。右の引用文を見ると、趙氏は、夂は止と同じであり、夂と夂とは甲骨文でも金文でも字形上の区別が無い、と指摘しているが、しかし夂と止の場合、足の先が下へ向くのと上に向くのとが相異していて、字形が一致していても必ずしも両字の意味が一致するとは限らないと思う。ただ、趙氏の指摘する通り、夂と夂の場合でも、字形は殆んど差が無いと言えるのである。

臆測を逞くすれば、夂と夂とは、本来は区別が無かったものであるのに、字形上の区別が生じてから却って字義上の区別も生じたのかも知れない。「混用された」という解釈が成り立つ裏には、このような事情が或は存在するのもかも知れないが、今は臆測の域に止めて置こう。

以上、愛の字の下の部分である夂の字について検討を試みたのであるが、藤堂明保氏の『学研・漢和大典』には、夂の字義を「おくれる・おそい。足を引きずる。また、足を引きずって、進みかねるさま。」とし、夂の字義を「いきなやんで足が遅れる」としている。愛の解字に「会意兼形声文字で、心がせつなく詰まって、足もそぞろに進まないさま」とあるのは、右の夂の字義にもとづいているからであろう。

「愛」の字義については後にも述べるが、諸橋轍次氏の『大漢和辞典』の夂の項には「安らかに行く」という字義も掲げられているのであって、その意味に夂を解するならば、藤堂明保氏の右の愛の解字は成り立たなくなるのである。

また、通説としては、「愛」の字の古形に「𠂔」とか「𠂕」とか「𠂖」などの字形が有ったとされている。私自身に結論

が出ていないことが、もし愛の字形が本来は此れ等の字形の中のどれかであったとすると、愛の字の原形には「爰」の字は含まれていなかったかも知れないのである。そして、愛の字の原義には若しかしたら「人を恋い慕う」意味は無かったかも知れないのである。このように考えて来ると、藤堂明保氏の解字は、現在の愛の字形と字義とに結びつけた説明であって、場合によっては原義とは駆け離れた解字になっているのではないか、という疑問が生じて来るのである。

ついでに愛の字に含まれる「心」であるが、藤堂明保氏は心の解字として、

心臓を描いた象形文字。それをシンというのは、沁（しみわたる）——滲（しみわたる）——浸（しみわたる）などと同系で、血液を細い血管のすみずみまで、しみわたらせる心臓の働きに着目したものである。（下略）

と述べている。先にも述べて置いたことであるが、古代中国人が、心臓の働きに関して右の解字にあるような知識を有していたかどうかは疑問である。また、藤堂氏は、同音の文字どしは字義も関係が有るといふ基本的把握の上に立って、その文字字を展開しているが、それならば沁や滲や浸などよりも、もっと「心」の字音に近い「新」や「辛」や「欣」などと結びつけて論ずべきであろう。（因みに現代中国語音でも、心と新・辛・欣とは、すべてxīnで、同音である。）

十

ここで補足的に「爰」の字に関連して述べて置きたい。

『説文解字』には、爰の字について、

(38) 从後至也。象人兩脛後有致之者。云々

とある。段玉裁の『説文解字注』には「至、当作致。」としているが、『説文解字』の爰の説明も、先に引用した爰の「(7) 行遲曳爰。象人兩脛有所躑也。云々」(人の両足がゆっくり進むという意味か)と同様に、分りにくい説明である。

『説文解字』では、「至」の字について、「(95) 鳥飛从高下至地也。云々」としている。(95)の字形の下の「一」は地面を示し、地に向って下りる鳥の姿をその上に描いているのである。なお、『古籀篇』には至の字形を(96)の形として掲げている。そして「不」(97)——『説文解字』の字形は(98)——と併せて、「又(97)字解曰、鳥飛上翔、不下来也。从一。一猶天也。此不至同意相受轉注字也。云々」と論じている。右の鳥飛から猶天也までは『説文解字』からの引用である。つまり(97)の「不」の字形の「一」は天を示しており、鳥が空に飛び地に下りて来ない状態が不であると『説文解字』では説明しているのである。従って、「至」は到達するとか来るとかいう意味を表わす字であり、「不」はまだそうならないという意味を表わす字であるように理解される。

因みに、藤堂明保氏は、至は矢が目標線まで届くさまを示す、とし、不はふっくらとふくれた花の萼を描いた象形文字、だとしている。また、山田勝美氏の『漢字の語源』には、至は矢が遠くから飛ばされてきて地上に逆さに傳って止まった形、とし、不は花の弁の付着している蒂の形、としている。両説の、鳥ではなく矢としている見解の根拠は何であろうか。なお、諸橋轍次氏の『大漢和辞典』の解字は『説文解字』の解字と同じ見解である。

さて、「(38) 从後至也」の至を、段玉裁は致とすべきだというが、それは『説文解字』に致について「(99) 送詣也。从攴从至。」とあるのに拠ったものであろう。この致は『説文解字』では愛や愛などと共に攴部に属している。また、「象人兩脛後有致之者」の致は具体的にどういうことを意味するのか判然としないのである。この場合の致は送詣の意味に解しても、文意がよく通じない。寧ろ『大漢和辞典』の語義の中の「いたる」(出典は『一切経音義』の「致、至也、到也。」「である)という意味にとって、致を至に置き換えたらどうかと思う。そして至を「到達する、追いつく」という意味に解釈すれば、『説文解字』の説明は、「攴は後から追いつくことである。人の両足の後から追いつくところを象ったものである。」という解釈になるが、それでも意味するものは明白ではない。疑問があるままにして後考を俟つ次第である。

なお、**爻**や**爻**の字形に似ている字としては、**午**と**久**とが挙げられよう。

「**午**」(クワ)は珍らしい字であるが、『説文解字』には、

(100) 跨歩也。从反爻。云々

と説明している。意味は「大またに歩く」という意味の文字である。

「**久**」は『説文解字』には、

(101) 以後爻之。象人兩脛後有距也。云々

と説明している。右の文中の**爻**にはヤイトその他の意味が有るが、『説文解字』には、**爻**を「**灼**也。从火、久声。」とし、更に**灼**の字については、「**灼**、**爻**也。从火、勻声。」と説明しているのである。従って右の場合の**爻**は、「火で焼く、火であぶる」の意味に解すべきであると思われ、「**久**は、後から火であぶる。」と解釈される。また**距**は鶏のケツメ(蹠爪)の意味が有るが、朱駿声の『説文通訓定声』の**距**の説明の中に引用されている「荀子仲尼注、距与拒同。敵也。」を応用して、「有距也」の**距**も「拒」(こぼむ・ふせぐ)の意味に解すると、「象人兩脛云々」は「人の兩足の後でふせぐところを象つたもの」と解釈し得るのである。しかし、やはり具体的にはどうか判然としない。藤堂明保氏は、背の曲つた老人と、その背の所に引っぱるるしのし印を加えた会意文字で、曲つて長い意を含む、と解字しているが、この説明の根拠もはっきりしないので、従い兼ねるのである。**久**の解字についても、疑問が有るままにして後考を俟ちたいと思う。

いま、**爻**(7)、**爻**(38)、**午**(100)、**久**(101)の字形を較べて見ると、四字とも字形が似ており、また『説文解字』の説明に拠れば、各字とも、足または歩行に関係の有る字だということが分る。しかし『説文解字』の説明では、字義の具体的な内容を擲むことは困難であると言えよう。

諸橋轍次氏の『大漢和辞典』（大修館書店、一九六八年版）に拠って、愛の異体字を拾って見ると、

『字彙補』（26）、同愛。

『正字通』愛、本作恣。

『字彙補』𦉰、古文愛字。

『集韻』恣、或作愛。古作𦉰・恣、通作𦉰。

『字彙補』𦉰、同愛。

のような字形の愛の字が掲げられている。

また、同辞典に拠って「愛」の字音を調べると、(26) 以外はアイの音のみ示しており、(26) にはアイとエと二つの音を示し、烏代切・隊韻としている。エという音が示されていることには注目したいが、(26) に始めから二つの音があったのか、或はアイがエの音に変化したのだろうか。もし始めから(26) にエの音があり、愛の字になってもエの音が受け継がれたということであるならば、地名の「愛媛」のエや、万葉仮名の愛(例えば806・多都能馬母 伊麻勿愛豆之可 阿遠爾与志…)などの音の由来が納得できるのである。なお、『日本古典文学大系』（岩波書店）所収の『万葉集』（全四冊）の附録に拠れば、万葉仮名に用いられた愛の異体字は(102)と(103)とだけのものである。

藤堂明保氏の『字研・漢和大典』には愛の字音を、上古 p. e. → 中古 e. i. → 中世 p. → 現代 e. と示している。

三根谷徹氏の『越南漢字音の研究』（東洋文庫、一九七二年）の一一二頁の「愛」の中古音は v. e. と示されているが、これはヴェトナム語の現代音と大差無い。現代ヴェトナム語では e. と表記し、第二声である点が、第四声である現代中国語

音と異なっている。

諸橋氏の『大漢和辞典』には、先述の如く、愛の字音をアイとし、『集韻』の於代切と、韻目として「隊」(去声)を挙げている。

『広韻』(台湾中華書局、一九六六年版)には、去声の十九・代の中に愛を烏代切とし、『玉篇』(同前)の卷第十の女部第二百二十四の愛も烏代切としている。於と烏とは同音であるから、『大漢和辞典』に掲げる於代切と、烏代切とは同じことである。

十二

諸橋氏の『大漢和辞典』には「愛」の字義を十七項目ほど挙げて見ているが、主なものを拾って見ると、

- ① いつくしむ (呂覽の注に、愛、心不能忘也。)
 - ② あわれむ (字彙に、愛、憐也。)
 - ③ したしむ (正韻に、愛、親也。)
 - ④ きにいる (字彙に、愛、寵也。)
 - ⑤ したう (論語の皇疏に、愛、慕也。)
 - ⑥ こいする、男女が情を通じる (戦国策の注に、愛、猶通也。)
 - ⑦ めでる (字彙に、愛、好樂也。)
 - ⑧ なさけをかける (広雅に、愛、仁也。)
- などとある。

また、商務印書館編審部の『辞源・修訂正統合編・附補編』（商務印書館、一九七〇年）には、①好也。慕也。猶言喜之也。②惠也。仁也。③親厚也。④吝惜也。として、それぞれの用例を挙げてゐる。

更に、辞海編輯委員會の『辞海・新版』（同編輯委員會編、中華書局香港分局、一九七九年版）では、①喜愛、愛好。②特指男女間有情。③惠。④吝嗇、愛惜。⑤貪。⑥姓。として、それぞれ用例を掲げている。

ついでながら、手もとに有る『漢越字典』（ハノイ、慧火印刷局、一九四二年）——すべてヴェトナム語表記である。附図その四参照——の心部九画にある愛の説明を日本語に訳して引用して置く。

①愛し好む（例えば愛慕は親しみ愛すること）、②大切に（例えば愛惜はひどく惜しがること）（自分を大切にすることは自愛という）、③深い恩（例えば遺愛は人に永く記憶される恩を残すこと）、④親しみ愛する（例えば、人莫不知愛其親は、人は誰しも親族を愛することを知らない者はいない、ということ）（他人の娘を呼ぶ時の習慣は令愛であり、「媛」とも書く）

ヴェトナム語のローマ字表記は十九世紀後半から普及したと言われるが、今日では漢字は全く使われていない。従って、右の字典も恐らく漢字で書かれた古典の解説などに利用されるものなのであろう。

さて、万葉仮名に於て愛がエの音をあらわす文字であったことは、先に述べた通りであるが、愛の字義を採って歌の中で、「愛伎妻等者」、「愛我念妹」、「愛人纒而師」、「愛八師」、「愛夫者」、「愛妻之兒」、「愛能盛爾」などと訓読され、左注の漢文中でも「愛情尤盛」とか「更起愛心」とか用いられていることは、上古の日本人が愛の字をどういう意味に受け取っていたかを知る手がかりになるであろう。

次に、中国古典に於ける愛の字の用例について其の字義を検討し、今まで述べて来たことと併せて、愛の字の原義について考察したいと思う。

【附記】

論稿の途中であるが、原稿の提出期限も過ぎ、予定枚数も超えてしまったので、ここで執筆を打ち切り、次の機会に右の続きを発表させて頂きたいと思うので、御諒承を乞う次第である。

昨今は公私ともに多忙で、この論稿も長期にわたって断続執筆しているため、敘述がかなり不統一になってしまったことをお許し頂きたい。

中断してしまった論稿ではあるが、一つの文字を採り上げて、その原形と原義とを探し求めつつ、従来見られがちだった『説文解字』に対する批判を再検討し且つ、ともすれば文字学者の靈（インスピレーション）感にもとづく解字が説かれる傾向にあることに対して、より具体的な用例に拠って解字を割り出せうと目ざしている点について、御留意頂けるなら幸いである。

本稿の粗漏不備については是非御教示下さるようお願い申上げる。

（昭和五十五年十二月識）